

報告

## 視覚課題としての仮名文字導入により言語能力に向上が認められた1症例

塩見 将志<sup>1)</sup>, 笠井新一郎<sup>2)</sup>, 長嶋比奈美<sup>1)</sup>, 稲田 勤<sup>1)</sup>, 苅田 知則<sup>1)</sup>  
間野 幸代<sup>1)</sup>, 山田 弘幸<sup>2)</sup>

### A child who showed improvement in speech ability after introduction of kana as a visual task

Masashi Shiomi<sup>1)</sup>, Shinichiro Kasai<sup>2)</sup>, Hinami Nagashima<sup>1)</sup>, Tsutomu Inada<sup>1)</sup>  
Tomonori Karita<sup>1)</sup>, Sachiyo Mano<sup>1)</sup>, Hiroyuki Yamada<sup>2)</sup>

#### 要 旨

音声言語による発信が、ほとんど認められないコミュニケーション態度非良好児に対して訓練を行った。音声言語の発信を目標とした訓練を行う前段階として、まずコミュニケーション態度の改善(Ⅰ期)を行った。その後、視覚課題としての仮名文字を導入(Ⅱ期)することにより、音声言語による発信面の向上を促した。その結果、コミュニケーション態度は改善し、音声言語による発信能力に大きな変化が認められた。本症例の経過においては、視覚課題として導入した仮名文字が、音声言語による発信能力に変化をもたらす有用な手段の一つであることが示唆された。

キーワード：コミュニケーション態度、視覚課題、仮名文字

#### Abstract

We performed training in a child with poor communication attitude showing negligible “presentation in spoken language”. As a preliminary stage of training to attain presentation in spoken language, communication attitude was improved (stage I). Subsequently, kana as a visual task was introduced (stage II) to improve presentation in spoken language.

As a result, communication attitude improved, and marked changes were observed in presentation in spoken language.

In the course of this child, kana introduced as a visual task was useful for improving presentation in spoken language.

Key words: communication attitude, visual task, kana

---

1) 高知リハビリテーション学院 言語療法学科

Department of Speech, Language and Hearing Pathology, Kochi Rehabilitation Institute

2) 九州保健福祉大学 保健科学部 言語聴覚療法学科

Language Hearing Treatment Subject of Study, Department of Health and Science, Kyushu University of Health and Welfare

#### 〈はじめに〉

音声言語の獲得において、視覚的な手がかりが有効な場合がある。そして、一定レベル以上の言語能力がある場合、さらにそれを伸ばすために文字言語を使用すると有効である事が多い<sup>1)</sup>、とされている。

今回私たちは、有意味語の表出がほとんど認められなかったコミュニケーション態度非良好児に対し言語聴覚療法（以下訓練）を実施した。

本児は、発信面の遅れに対し、受信面においては生活年齢に近い値を示した。また、視覚的な図形認知・弁別能力にたけており、アルファベットなどの記号的な物に特に興味を示した。このことから、仮名文字を視覚刺激として導入することが、言語能力の向上に繋がる可能性があるかと判断した。

半年間の訓練により、コミュニケーション態度の改善および言語能力の向上が認められたので報告する。

#### 〈症例〉

1998年3月16日生、男児。主訴は「ことばがでない」。在胎37週、切迫流産・切迫早産により入院。出生時体重は3234グラム、臍帯が首に巻き付いていた。

発達歴は、定額5か月、始歩1歳9か月、ジャーゴン様の発話1歳6か月、指差し1歳10か月であった。

#### 〈訓練開始時評価〉

初診は2001年4月27日、2歳1か月時。アイコンタクトが弱く、他者のペースに合わせる事が困難であった。聴力については正常な聴性行動反応が得られた。

国リ八式言語発達遅滞検査（以下S-S法）を2001年6月8日、2歳2か月時に実施した（表1・図1）。

結果、他者からの働きかけに対する反応や他者への注目に弱さが認められたことから、児をコミュニケーション態度非良好、群と判断した。また、記号形式-指示内容関係の受信面は段階3-2（音声記号）、1歳10か月レベル。発信面は音声による発信はほとんど認められず、1歳未満のレベルであった。しかし、動作性課題は2歳5か月のレベルと視

覚的な図形認知・弁別に高い能力を示し、動作性能力と言語能力の間に乖離が認められた。

検査時においては、特に発信面、事物名称課題実施時には集中力を欠き椅子から離れようとする場面が認められた。

母親からは、アルファベットに興味がある、カードをきちんとならべるおよび自分の思い通りにならないと暴れるなどの情報を得た。

以上の事から、コミュニケーション態度の改善と言語能力の向上を目的とした訓練が必要と考えられた。

#### 〈訓練〉

訓練目標を音声言語の発信能力向上およびその訓練を行うためのコミュニケーション態度の改善とし、基本的には隔週のペースで訓練を実施した。

訓練経過は、期（2001年4月～6月前半）では、音声言語の発信能力向上の訓練を行うための前段階として、コミュニケーション態度の改善へのアプローチを試みた。はめ板・積木などの視覚的課題を用い、他者とのやりとりの促進を行った。開始時には、他者のペースに合わせる事が困難であり、発声および行動により自分の欲しいピースを強く訴える場面や一緒に積木で遊ぶことを拒否する場面が多く認められた。しかし、徐々に他者とのやりとりが成立する事が増えて、訓練当初に比べコミュニケーション態度が改善されてきた。母親には、可能な限り児にかかわり共感することおよび発信面の学習を支える受信面の向上のため絵本の読み聴かせを実施するよう指導を行った。

期（2001年6月後半～9月前半）では、コミュニケーション態度に変化が認められ、他者との物品によるやりとりが可能となり、言語課題に対する「取り組む姿勢」が確立しつつあるように思われた。訓練において児が視覚課題を好み、S-S法においても10種図形が9/10形式可能であったことおよび本児がアルファベット等の記号的なものに興味を示していたことなどから、仮名文字を視覚刺激として導入する事が発信面の促進に有効であると考え訓練を行った。結果、2-3音節語（名詞）の音読が可能

となるに伴い発信面での変化が認められた。

期(2001年9月後半~10月)では、音声による受信が可能でかつ音読可能な単語(2-3音節語)について呼称訓練を行った。また、動詞・文レベルの受信能力の拡充とともに文レベルの発信も促した。

事物名称の発信が可能となった語が増大し、訓練中に音声による訴えが認められるようになった(表2)。

〈仮名文字導入のプロセス〉

仮名文字の導入は、北九州市立総合療育センターにおける文字指導プログラム<sup>2)</sup>を基本に実施した。

「文字列パターンのポインティング」

絵カード(名詞)の裏に仮名文字を記したもの

(音声による受信可能な2-3音節語)を用いた。カードの絵面を上に本児の前に並べその事物を音声により確認しながら文字面に裏返す。その後、訓練者が音声により発信したカードをポインティングするよう指示した。

訓練開始時には、1/3選択で不確実であったが、導入から3度目の訓練で文字列パターンのポインティングはほぼ可能となった。また、導入により家庭でも仮名文字に興味を示した。

「文字列パターンによる音声刺激の想起」

音声による受信可能な2-3音節語を使用し音読を促すが、訓練開始時は反応が得られず不可能であった。

訓練者が仮名1文字ずつをポインティングしな

表1 S-S法実施時の対象児の行動

	初診時評価 (CA 2:2)	再評価 (CA 2:6-7)
コミュニケーション態度	他者への注目・ペースにあわせる(-) アイコンタクト(弱)	他者への注目・ペースにあわせる(+) アイコンタクト(弱)
記号形式-指示内容関係	受信:動作語(+) 事物名称成人語(+) 発信:事物名称のnaming(-)	受信:3語連鎖 1/2形式(動作主+対象+動作)(+) 色の受信(+) 発信:事物名称のnaming・色の発信(+)
音声模倣	母音 /a/, /i/, o/, 子音 / /(+), /p/(-)	母音 /a/, /i/, o/, 子音 / /(+), /p/(+)
身振り模倣	促すも認められず	促すことで認められる
動作性課題	10種図形 9/10(+) 積木の構成,描線(-)	10種図形 10/10(+) 積木の構成,描線(-)

(+)可能,(-)不可能

表2 訓練経過と各段階における対象児の行動観察

訓練段階	目的	訓練課題	行動観察
期			STのペースにあわせることが困難 自分の欲しいピースを訴える,一緒に遊ぶことの拒否 あわせることが可能 言語課題に対する「取り組む姿勢」の確立 10種図形9/10(+), アルファベット等の記号への興味( ) 母親指導:児に関わり共感する,絵本の読みきかせ
2001年4月~6月前半 CA:2歳1~3か月	コミュニケーション態度の改善	はめ板・積木を使ったやりとりの促進	
期			1/3選択で実施するも不確実 ポインティング可能となる 2音節語の音読(+) 音読可能時:逐次読み 改善
2001年6月後半~9月前半 CA:2歳3~6か月	音読能力の獲得・向上	仮名文字の導入 (「文字列パターンの記憶形成」)	
期			動詞・文レベルの受信能力( ),文レベルの発信( ) 事物名称のnaming( ),訓練中の音声表出( )
2001年9月後半~10月 CA:2歳6~7か月	音声言語による発信面の向上	受信可能かつ音読可能な単語(2~3音節語)の呼称	

(+)可能,(-)不可能,( )増加

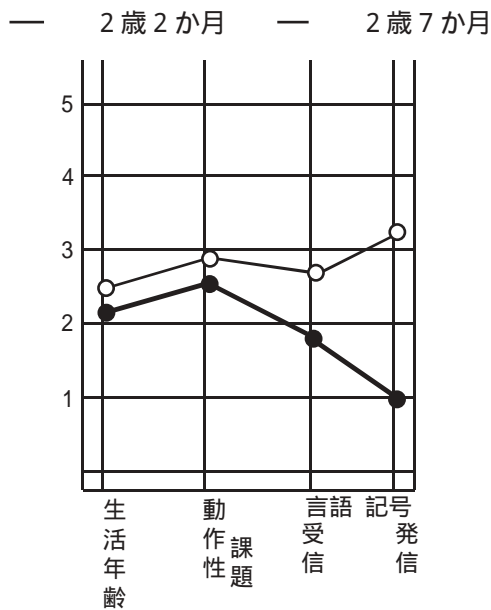


図1 個体内プロフィール (CA: 2歳7か月)

から音読を促すと可能となった。しかし、逐次読みの場合には意味を伴わない可能性があり、その点を補うために仮名文字と絵を同時に呈示しながら音読を指示した。また、可能な限り正常なプロソディーを意識させる目的で、訓練者は本児の表出の復唱を行った。

逐次読みについての改善が徐々に認められ始め、3音節語では音読困難な場面が認められるも2音節語ではほぼ可能となった。

〈再評価〉

S - S法を2001年11月2日、2歳7か月時に再度実施した(表1・図1)。

初診時評価との比較において、コミュニケーション態度についての変化は認められるものの良好と言えるまでの改善には至っておらず、前回と同様 群と判断した。

記号形式 - 指示内容関係の受信面は段階3 - 2 (音声記号) 1歳10か月レベルから段階4 - 2 (3語連鎖) となり色の受信も可能となったことから、発達年齢は2歳10か月のレベルとなった。

発信面は1歳未満のレベルから色の発信が可能となったことから3歳2か月のレベルと判断した。

しかし、日常生活場面においては「こうえん い

くかー」、「ママ おっきよー」との2語連鎖による発信にとどまっていた。

〈考察〉

斉藤は(1993)早期からの文字指導の効果として「仮名文字という有限個の視覚記号を反復して教えることによって、確実に言語発達遅滞児の変化を確かめることができ」、「仮名文字が読めるということは言語発達障害児の脳内に変化が起きたことを証明している」<sup>2)</sup>と述べている。また、櫻井(2001)はStatistical Parametric Mapping (SPM)により仮名音読の際には一次運動野・運動野、Broca野の一部(44野)、上側頭回および中・下後頭回など広範な領域が賦活されることを報告している<sup>3)</sup>。

本児においても視覚課題として仮名文字を導入し、音読が可能となることで脳内の広範な領域が賦活され、言語能力が向上した可能性が考えられた。

音声発信が困難な場合においては発信面にのみ注目する事が多いが、受信の段階が発信面の学習を支えることが示唆されており<sup>4)</sup>、今回の症例においても、受信面に留意しながら視覚課題として仮名文字を導入し、音読能力を獲得する事が言語能力に変化をもたらす一手段であることが示唆された。

しかし、発信面での変化は本来持っていたと思われる潜在能力が、仮名文字などによる視覚課題によって顕在化し、能力の向上が認められたも考えられる。

発信面はS - S法の評価において3歳2か月レベルを示したが、発信課題においては「おかあさんがりんごをあらう」を「てをあらう」とし、日常生活場面においても2語連鎖による発信が多いという事実もある。つまり日常生活場面におけるコミュニケーション能力と検査場面での乖離が認められており、現時点では正常発達に到達したとは言い難い。

今後は、引き続きコミュニケーション態度の改善へのアプローチを実施しつつ言語訓練を行うことおよびテストバッテリーを組むことで本児の能力をより詳細に把握することが必要と思われる。

〈引用文献〉

- 1) 白坂康俊：文字訓練の考え方，第9回日本語療法学会・総会シンポジウム抄録集，1-6，1993年．
- 2) 斉藤吉人：早期文字指導の考え方とその指導，第9回日本語療法学会・総会シンポジウム抄録集，13-17，1993年．
- 3) 櫻井靖久：PET からみた音読および黙読の神経機構，音声言語医学，42巻2号，175-180，2001年．
- 4) 大西祐好：音声発信困難な言語発達遅滞児の言語指導，言語発達遅滞研究，131-144，1993年．

〈参考文献〉

- 1) 山田 純：日本語児の発達性難読症，音声言語医学，38巻3号，287-290，1997年．
- 2) 小寺富子：言語・認知科学と言語発達遅滞の臨床，音声言語医学，38巻3号，304-308，1997年．
- 3) 金子真人，宇野 彰・他：仮名と漢字に特異的な読み書き障害を示した学習障害児の仮名書字訓練，音声言語医学，39巻3号，274-278，1998年．
- 4) 林 邦夫，松井茂昭，中川忠雄：読みを育てる，第3版，コレール社，1999年．